

響け! 私たちのエール!

今年の夏の甲子園への出場を果たした県立静岡高等学校(以下、静高)。静岡野球部の試合を盛り上げる立役者が“応援指導部”です。試合時、スタンドで全校生徒の応援を先導する部員は現在、男子4人・女子8人の12人で活動しています。入部のきっかけや応援にかける情熱と共に、コロナ禍での応援の工夫を聞きました。

静岡応援指導部のみなさん



左から奥山さん、藁科さん、井上さん

答えてくれたのは、いずれも応援指導部の3年生で、第60代団長の藁科愛桜さん、副団長の井上紗彩さん、奥山翔紀さん。他の部活と兼部している部員も多く、試合時の力強い応援に魅了されて入部する人もいます。

井上 3人それぞれ入部した時期は違います。私は文化祭で応援指導部のパフォーマンスを見て、カッコいいな、キラキラしているな、と感じたことがきっかけで入部を決めました。

藁科 入部に当たって、これまで運動をしてこなかったのが家族から体力面の心配はされましたが、今では協力してくれています!

応援団と聞くと、「学ラン」をイメージする人も多いのではないだろうか。女子部員の多い静岡の応援指導部でも、全員が学ランを着ます。

藁科 学ランを着るとスイッチが入ります。頑張ろう!と応援の方に意識が向いて気が引き締まります。

井上 学ランを着て応援することへの抵抗は全くありませんでした。学ランを着て登校したいくらいです!

奥山 2人の学ラン姿はカッコいい!よく似合っています。

と、学ランへの思いを語ってくれました。女子部員は個々に学ランを購入したり借りたりして用意しています。

Q. 応援をしていてやりがいを感じる瞬間はいつですか?

藁科 応援が終わった後にみんながニコニコしていたり、拍手をもらったり、声を掛けてもらったりするととても嬉しくて、頑張ってたかったなと思います。野球部の子たちから「あり





がとう」と声を掛けてもらったこともありです。

井上 応援指導部は他の部活と違って単体では成り立たず、応援をさせてくれる相手がいて成り立つもの。試合が厳しい状況でも応援をするこ

とで良い流れが来ると、「届いたのかな!」と感じて嬉しくなるし、選手が笑っているのを見ると楽しいと感じます。
奥山 自分たちが応援をすることで、(部員以外の)一般客も盛り上がりたてたり、人が笑顔になってくれたりすることが嬉しいです。そういう場面に出合うのもっと頑張りたいなと思います。

Q. 応援をされていて大変なことはありますか?

葦科 コロナ禍以前は大きな声を出して応援していました。でも、今年は声が出せないなかで応援をするため、どう盛り上げるかが悩みどころです。スケッチブックをボードにして生徒とコミュニケーションを取りたいと思います。

井上 今年の5月までは無観客試合が続きました。私たちは球場に入ることすらできなかったのです。実際の球場での応援のスタイルを共有できていない部分があります。先が読めないなかでモチベーションを保ったまま練習を

続けることが大変でした。
奥山 女子より声を通らないことが大変です。周りの女子部員と応援の声のトーンを合わせるのが難しいです。



スケッチブックには「拍手」の文字

「ねつとわあく」編集員の間では「応援団」男社会の印象を受ける、という声があがりましたが、応援指導部の皆さんはどう考えているのでしょうか。

井上 男女比の質問があること自体が、「男子は学ランを着て、女子はチアで応援」という固定観念がある証拠なのかな、と思います。男女という2つの性だけでしか物事を考えないことも時代錯誤だと感じています。応援指導部に入る際も、男女比に関しての抵抗は全くなかったです。

葦科 私が入部した頃には既に女子部員の方が多かったですね。小学校の時に応援団長をやったことがあって、もう一度やりたいなと思って団長になりました。

奥山 1年生の時に3人とも同じクラスだったので、女子が多くても入りづらさは全くありませんでした。兼部したいと母親に相談した時も背中を押してもらいました。友人たちからは意外に思われたかもしれませんが(笑)。入部してからは後輩との関わりも増えて、「明るくなったね」と言われます。

葦科 厳しい上下関係もなく、部員一人ひとりと関わりを持つことができているのでとにかく仲が良いです! 良い雰囲気だと思います。

Q. 応援をしている時に、一番輝いていると思う瞬間や大切にしていることはありますか?

葦科 校歌・エールは団長しかできないので力を入れてやっています。常に自分の一番良い状態を出せるように日々練習している中で、誇りに思っているところです!

井上 自分の型をかつこよく見せることはもちろんですが、それ以上に、生徒のみなさんと一緒に思いを届けることを大切にしています。

奥山 何事も形から完璧にできるようにしています。「テコ」や「突き」は自信をもってできるようになりました。人前で話すことは得意ではないですが、球場でどれだけ一般の生徒やお客さんを巻き込めるか、というのを大切にしています。

あとうき

応援指導部の皆さんの生き生きとした様子を見て、「応援の力はすごい!」と感動し、すっかり「応援」に魅了されてしまいました。

無観客開催となった東京オリンピックや夏の甲子園を見てみると、「選手」と「観客」と「応援」は離れた場所でも一体となつて結びついていることに気がつきました。どんなスポーツにも応援する人がいて、選手はその応援をも力に代えて競技を行い、そんな選手の姿から観客は勇気と感動をもらっています。

私たち一人ひとりの「応援をしたい!」という純粋な気持ち、スポーツをより白熱させ、力を結束させるのだと感じました。コロナ禍で余儀なくされている無観客試合や応援の制限がなくなり、再び全力の「エール」を届けることができる日が待ち遠しい!

(森朱里)



「ねっとわあく」アーカイブ

前号から開始した「ねっとわあく」アーカイブ。各方面から様々な反響がありました。今回は、**編集員（緑枠）**だけではなく静岡大学人文社会科学部社会学科・白井千晶教授のゼミに所属する**大学生（オレンジ枠）**が思ったこと、感じたことも聞いてみました。

子どもの数で何倍頑張ったとかじゃないのになって思います。

若いころ遊びすぎて余計なお世話だね。

お母さんが25歳で私を産んでいるため、私もそのぐらいで産みたいと思っていた。しかし、社会人2・3年目という仕事を頑張っている最中では同期から遅れをとるのが怖い。子育てにお金がかかることも考えると現実的には難しいと思う。20代後半とか30代前半になってしまうのではないかな。

子どもは欲しいと思うが社会人として仕事をしながらではないと現実味がないため、まだ具体的に考えられない。しかし、出産となると女性の場合は早くしないといけないと思う。

元がとれないって。元ってなんだろう？って。

産める社会になってほしいのは今とは変わらない。産んで終わるのではなく、育てないといけないから。育てる環境が整っていないから、減少せざるを得ないというかな。

高校生の頃は若いママに憧れていたため22～23歳で産みたいと思っていた。しかし、大学に入って来年から社会人になると思うと普通に無理だなと思った。30歳を超えてしまうのが普通。

子どもから手が離れた後では遅い。子どもを育てるのにお金が必要なため、それまでに働きたいと思うのが普通。手が離れるまでにお金がかかるのでは。

子どもの手が離れてから仕事につけばいいって簡単に言うけど、そこから仕事を始めるのはハードルが高い。

男性はどうなの？男性も家庭のことに参画したら、そうはならないのでは？

子育ては楽しい
やっぱり少ないんじゃない？
そうかあ。一人半なんですか、というこは、三人娘の母である私は二倍頑張ったということですね。子育ては、いろいろ苦労があるけれど、楽しいですよ。
(30代 小学校教諭)

産まないのは損
子供を育てるといふより、自分が成長させてもらっているという気がする。子供を産まないのは損だと思う。
(30代 主婦)

自分たち夫婦が優先の時代
夫婦お互いが楽しむ時代になってきて、子供のためにというより、まず、自分たちのことを考えているのではないかな。
(40代 主婦)

少ない
少ないわね。やっぱり、三人はいた方がいいと思う。
(40代 主婦)

社会の風潮



産んで良かった！
結婚すれば当然産むべき。三人娘のうちの誰かが老後はみてくれるだろう。いろんなことを考えると子供の将来は多難だろうが、やはり産んで良かったと信じている。
(30代 パート)

寂しいなあ
夫婦二人に子供一・五三人では元がとれないなあ。人口が減少していくことに寂しさを感じます。
(50代 主婦)

産める社会になってほしい
少しは改善されてきているかもしれないが、仕事を持ちながら子育てをする社会環境が整っていない点や、今の生活を楽しみたいと考えている点から一・五三はうすける。子供との時間を持ちながら、自分も働けるような社会になってほしい。
(20代 会社員)

何故、産まないの？
子供が授からない私から見れば子育てをしない方が、おかしと思うの。子供から手が離れた後で仕事につけば、いいじゃない。
(50代 主婦)

家の中にはぎやかな方

生活のためや自分が働きたいから、いらぬという人もいるが、家の中がにぎやかな方がよいと思うので、寂しい数字。職業を持っている女性は、家庭が相当犠牲になっていると思う。
(60代 自営業主婦)



どう思いますか？

女性が生涯に出産する子供の平均数は、人を更に下回る背景には、女性の晩婚化。この数字、皆さんは？



下回る背景には「女性の晩婚化や未婚率の上昇」だけなのか。女性だけの問題だけじゃないの。もっとほかにも理由はある。30年経っても上がらないのだから。

田舎は何十年後かに消滅してしまうということを知った時、田舎出身なため自分の地元がなくなってしまうなら出生率が上がって欲しいと思った。自分の地元がなくなってしまうことを加味したら、子どもをつくらないといけないという思いはある。

※「出生率」は人口千対で算出されますが、「合計特殊出生率」は15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、1人の女性がその年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子どもの数に相当するデータのため「出生率」とは異なります。記事内の「出生率1.53」は「合計特殊出生率」のことを表しています。

1992 年はこんな年

アメリカ人作家レベッカ・ウォーカーがフェミニズム雑誌『ミズ』で「第三波フェミニズム」を提唱。多様性の平等が叫ばれるように。国内では、3月東海道新幹線のぞみ運行開始、6月PKO法案が成立、7月バルセロナ五輪で競泳200メートル平泳ぎ・岩崎恭子が金メダル獲得、9月宇宙飛行士の毛利衛らを乗せたスペースシャトル「エンデバー」打ち上げ、10月佐川献金疑惑で金丸信が議員辞職、11月貴花田関と宮沢りえが婚約。



1992(平成4)年
発行第21号
ウォッチング

「出生率1.53人をどう思いますか?」

子どもは好きだし育てたいと思うので、いずれ子どもは欲しい。(もしパートナーから子どもは欲しくないとされたら) 価値観が違うなと思って別れる。

結婚することが当たり前、子どもを産むことが当たり前という議論がおかしい。結婚したら子どもを産むという考えも違うと思う。

イラストにあるような家族ってあまりない。同居している家庭自体少ないのでは。

この同居ですって・・・お前は手伝っているのかっていう。

親と同居しても別にいいと思う。自分は母親側の祖父母と同居し、その祖父母に助けてもらったから同居は良いと思う。相手の親の同居でもいい。

絶対、同居は嫌! 自分の親でも嫌。インスタの育児マンガで1か月だけでも里帰り出産で嫌になったなど実の親でもある。親とは仲が悪いわけではないけど、親の言うことが100正しいと思わないときもあるため、子どもが産まれたら余計かな・・・と思う。

3人はいた方がいいという3人は何だろう。今はそんなにいますかね。

白井千晶教授から

出生率1.53を記録した時代の声を改めて読むと、そりゃー少子化にもなるわ、と思います。少子化を語る声そのものが、産みにくさ、育てにくさを物語っています。使命感や社会的責任、プレッシャーだけで産み育てることはできません。

編集委員のコメントは、その「声」が自らに向けてられているような当事者性がある、「もとがとれないって何?」という反発や苛立ちを感じていることがよくわかります。大学生はそんな人生の先輩の葛藤も冷静に理解していて、結婚と親になることは別のこと、仕事は必要、と現実的です。誰もがのびのびと人生を謳歌できる社会が作れますように。



※ねっとわあくのバックナンバーは、あざれあ図書館及びポータルサイト「あざれあナビ」で閲覧できます。
<https://www.azarea-navi.jp/netwaaku/>

産まないのは損とか産んでよかったとかは女性の意見ですよ。でも、男性の方が産むべきであるとか出産計画をたててとか機械じやないんだから・・・ひとごとのよう。きれいごとばかり言っても・・・

男の目 ウォッチ
出生率1.53人を

平成3年の合計特殊出生率(1人の1.53人。過去最低だった前年の1.54や未婚率の上昇などが考えられます)

人類のために必要
子孫繁栄、人類のために当然子供は必要。産める人は産むべきである。
(50代 会社員)

地球規模で考えるならば!
世界的視野に立ち、地球の人口増加の現状からすればうなずけるが、日本人の立場としたら、年齢構成が逆ピラミッドなため、日本という国を支えていけるのだろうかという危惧している。
(70代 団体役員)

同居して産む
これだけ女の人が働く時代、共働きの大勢が子供をたくさん産むのは無理です。だから、うちは同居です。
(30代 会社員)

子供に無関心、無責任
パチンコを夫婦でしていて、車の中の幼児を死なすような現実。つまり親に責任感がないのでは...
(40代 会社員)

しつかりした出産計画で
将来的に望ましくない。産める状況にあるのに産まない人も多いように思う。しつかりと出産計画を立てて最低二人、できれば三人産んでほしい。
(50代 経営者)

いろんな人生観が
結婚して五年間、経済的理由で控えた。周りからいろいろ言われたが、人にはいろいろな人生観がある。今の世の中、昔ほど世間を気にせず、自分たちの都合で産むものだという考え方が広がっていると思う。
(40代 自営業)

家庭があつてこそ
人は家庭があつてこそ快適な生活ができると思っています。少人数が合理的で経済的にもよいという考えがありますが、様々な「人」で構成されている家庭での生活の方が、人生を有意義に過ごすことができると思います。
(20代 水泳コーチ)

お金がかかるから?
子供を一人か二人しか望まないのは、経済的な負担が大きすぎるかな。
(30代 公務員)

遺伝子学的には...
遺伝子学的には出生率低下はあり得ない。「そんなバカな!」遺伝子と神について「竹内久美子著」より。一・五三は社会に産めない原因があると思う。いずれは上昇すると思うから悲観はしていない。
(30代 会社員)

結婚したら子どもは2人ぐらい欲しい。自分が一人っ子だったため、きょうだいがいたら話せる環境があつていいなと思う。しかし、3人だと経済的に厳しそうだから2人がいいな。

20代前半だと、もし働いて給料もらっても子どもの分まで養える自信がない。ある程度落ち着いてから・・・と思うと30歳前後に子どもが欲しい。

あざれあ図書室にある おすすめの本を紹介します！



『生理ちゃん 全4巻』
(小山健 KADOKAWA 2018年～2020年)
腹痛、頭痛、眠気、貧血、むくみ…、毎月やってくるつら～い生理痛。擬人化したキャラクター“生理ちゃん”が、生理パンチを繰り出しながらあなたに優しく寄り添います。周りの人と生理の話をするきっかけになる作品です。



『年代別女性の健康と働き方マニュアル』
(NPO法人女性の健康とメノポーズ協会//編著 SCICUS 2012年)
女性が生涯を通じて健やかで充実した生き方・働き方を続けるために…。女性の健康について知っておきたい情報やより良い働き方のための提案などを、20代から70代まで年代別にイラストを交えて紹介します。



『『ノー』をいえる子どもに』
(サリー・J・クーパー 童話館出版 1995年)
CAPは、大人が子どもを保護するだけでなく、子ども自身が自分で判断し、行動するパワーを引き出し、自分という存在の大切さを伝える人権教育です。CAPについて興味がある人におすすめの1冊です。

利用案内

貸出：図書・雑誌10冊、ビデオ・DVD4本(3週間)

※貸出カードが必要です。現住所、生年月日を確認できる本人確認書類をお持ちのうえ、カウンターにてお申込みください。

開室時間：平日9:00～18:00、土日祝9:00～17:00

休室日：第1・3・5日曜日、図書整理日、年末年始

TEL:054-255-8763 FAX:054-255-8759



Shizuoka Prefecture

ねっとわあく

2021/10/29 Vol.76

「ねっとわあく」は年1～2回発行します。県内の男女共同参画センター、市町役場、図書館などの公共施設で配布しています。「ねっとわあく」のバックナンバーは、あざれあ図書室や静岡県男女共同参画ポータルサイト「あざれあナビ」で閲覧できます。
あざれあナビ <https://www.azareana-navi.jp/>

編集後記



後列左から 森朱里 望月富美代
前列左から 小柳朝美 國井良子 其田育子

●リプロがテーマの今号。性に関する健康と権利は、私にとってひとごとではない。卵巣などを摘出する手術をしないと戸籍の性別変更ができない今の日本で、トランスジェンダー男性の夫(戸籍は女性)は、この秋、「オペなしで!戸籍上も『俺』になりたい裁判」の申し立てをする。自分のカラダと生き方を自分で決められることは、人権に直結していて、生きる上でとても大切なこと。選択が尊重され、多様性を認め合う社会を目指し、私たちは声を上げる。

(編集長 國井良子)

●コロナ禍で大好きな旅行ができない時間を使い、編集員に挑戦しました。旅行をしているように知らなかった世界が見え、新しい発見や出会いがありました。記事を読んでいただいた方にも、新しい世界が届けられることを願っています。

(小柳朝美)

●取材を通して様々な立場の方からの話を聞き、改めて、現場からの話を聞くことの大切さ、楽しさを実感しました。人と出会える機会が減った今、小さな出会いも大切にしたいです。

(其田育子)

●自らが情報を発信できればと思い立ち、初めて編集員として携わるようになりました。記事にする過程の大変さを実感しながら、様々な方々との出会いに、自らが成長できたように思います。この記事から何かを感じ、それぞれ更なる行動につながれば嬉しいです。

(望月富美代)

●編集員の皆様にたくさんお世話になり、私の視野も広がりました。慣れない編集でしたが、いろいろな方の思いを誌面でお届けすることができ、嬉しく思います。私も微力ではありますが、「ねっとわあく」に新しい風を吹かせることができたかなと思っておりますので、多くの方に読んでいただければ幸いです。

(森朱里)

発行日/令和3年10月29日

企画・編集・発行/あざれあ交流会議グループ

〒422-8063 静岡県駿河区馬淵1丁目17-1

TEL/054-250-8147 FAX/054-251-5085

編集長/國井良子

編集員/小柳朝美、其田育子、

望月富美代、森朱里

印刷/星光社印刷株式会社

